

一集 会 状 況一

	男	女	計	
壮 年 会	5/30	11	0	11
主 日 礼 拜	5/31	20	66	86
教 会 学 校	5/31	11	37	48
成 人 科	5/31	1	4	5
婦 人 会	6/ 2	1	10	11
入 門 講 座	16/ 4	2	6	8

一牧 師 室 から一

友人の教会で俳優の奈良岡朋子さんを招いて聖書朗読をしてもらったそうである。すると、今日の私たちは聖書を目で読んでいますが、聖書は耳で聞くものと分かったと言う。初代の諸教会においては、難しい釈義や解釈はなく、そのままの廻し読みだったに違いない。婦人会の聖書研究で「哀歌」を声優になったつもりで輪読した。バビロンに滅ぼされ、華麗なエルサレム神殿は崩壊し、有能な人間は

捕囚になり、若者は苦役につき、女性は犯され、子供は飢えて死ぬ悲惨の中に詩人は立ち尽くしている。更に「憐れみ深い女の手で自分の子供を煮炊きした」と想像を絶する現実を直視している。哀歌は、戦後瓦礫の中にあった日本の教会で愛読されたことが納得できる。しかし、哀歌の詩人は覚めている。ヘブライ語のアルファベット順を並べて歌う芸術性を持ち「主は正しい。わたしの口が背いたのだ」と神の裁きを率直に受容するほど余裕がある。この余裕は何なのなか。詩人は「主は、決してあなたをいつまでも捨て置かれはしない。主の慈しみは深く、懲らしめても、また憐れんでくださる。人の子らを苦しめ悩ますことがあっても、それが御心なのではない」と信仰を語っている。

私たちは苦悩の中にある時、苦悩の大きさに埋没してしまうが、信仰は神に対する望みにおいて、事柄を客体化できる。哀歌の詩人の余裕はこの客体化できる信仰から来るのではないだろうか。

週 報

1992年6月7日 聖霊降臨節第1主日

聖霊降臨日（ペンテコステ）

巻 13 10 号

1992年度教会主題

「復活の主を見る」

聖 句 すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してください、わたしたちの心は燃えていたではないか」語り合った。

ルカによる福音書 24章31節～32節

- 目 標
1. 生活を整えて礼拝、諸集会を守る。
 2. 交わりを深めつつ、教会の新しい方向を求める。

日本キリスト教団

横浜港南台教会

〒233 横浜市港南区港南台 7丁目-8-29

電話 045-833-5323、045-833-6616

振替 横浜 9-13994

牧 師 秋 吉 隆 雄